
ラブカクテルス その72

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その72

【Nコード】

N6158E

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は贅沢な食卓に合うカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は付き合いでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私がソワソワしていると、いよいよチャイムの音が響き、時が訪れた事を知らせてきた。

私は思い切り愛想のよい声でそのチャイムに応え、玄関まで急いだ。ドアを開く前に旦那と息子を玄関に立たせて、一呼吸ついたところでドアを開けた。

そのドアの向こうには、見たことがないほどめかし込んだお隣さんの家族が、やはり愛想笑いで立っていたのだった。

この度、自治会の条令なるもので、近所の治安維持のため、昔のように顔と顔がわかる社会を取り戻す一管事業として、ディナー招待法案が定められた。

これは平たく言うと、ご近所付き合いを復活させるための条令であるらしい。

家族で周りとの関係を持たなくなつた今の時代、隣にどんな人が住んでいるのか、また隣で何かおかしい事が起きていないか。

今まではかなり無関心でも通用する社会だったが、定期的な顔合わせの場を半ば強制的に設ければ、自然とご近所付き合いが復活するだろうというのが狙いにあるのだという。

しかし簡単に言うが、主婦にとつてはかなりの荷が重い決まり事だ。今の我が家の家計は大していい訳ではなく、外食なんて半年に一回あるかないか。

旦那のコズカイなど月に五千円。

お陰で旦那はタバコを止めたほどだ。

それに加えて息子も小学校に入りお金が係る年頃。

辛いのだ。

しかしそこに目を着けたのか、この条令にはある種の特典があつた。夕食会を一週に一回、交互にお隣と行なつていれば、その時の食費は各自治体から、申請した後に支払われる。

つまりただになるのだった。

これはバカに出来ない話だ。

何しろその金額の設定と言つたら、内の普段の食事の三食分に当たる。

私は本屋に行き、今話題の誰でも簡単豪華な夕食用レシピの本を買つて、慣れない言葉や食材と格闘した。

そして努力の結果、食器も増やして、この頃のレパートリーといったら、まるで和洋折衷なんでもござれのバイキングのビュッフェ状態だ。

こうなるまでに家族には色々な物を食わせたせいで、息子は一時夕食恐怖症にまでなつてしまつたが、今はそんな事は言わせない、と言つよりむしろ、息子と旦那の生きている楽しみは、夕食だと言つて喜んでさえいる。

幸せは食にありと言つても過言ではないくらいだ。

そして今日のこの日を迎えたが、いよいよ本番の招待。

それはそれは腕に頼を掛けて作ったディナー。
失敗などあるはずがない。

それに加えて、今週の初めから礼儀作法の練習までして、旦那と、特に息子がへマをやらないように特訓した。

今夜の我が家は完璧なのだった。

なぜそこまで私が勝負に出るまで頑張らなくてはいけないのかという、我が家の住んでいるのは社宅だ。

しかも隣と言えば旦那の上司が住んでいるときたものである。なんてツイていないのだろうか。

しかもその奥さんと言えば、この社宅一お喋り好きで、私はあまり顔を合わせるのが苦手なタイプなのである。

それなのに、そんなのを敵に回すようなモテナシをしようものなら、ここでの生活が住みづらくなるのはおろか、旦那の出世まで危うくなるに違いない。

しかし逆に言えば、上司に気に入られるチャンスでもある訳で、万年課長から部長になるのも、もしかしたらあり得る話ではないか？ 私達はそんな事に考えを切り替えて今夜に挑んだのだった。

テーブルにはこれでもかと言わんばかりの高級食器を並べ、その甲斐あってダイニングに入ってきた上司家族は歓声を挙げた。

私はこの時だけ、見せかけではなく、本心からの笑顔を浮かべられた。

全員が席に着き、私はナプキンを膝に掛けていつでも立ち上げられるようにとマナーに従い、旦那と息子もナプキンを首に上手に掛けて宴の支度を整えた。

すると上司家族も、そんな私達を見てナプキンを広げると、ぎこちなく私達の真似をした。

そこをすかさず、息子が上司の奥さんに言った。

おばさん、おばさんはお食事の時に立ち上がるの？

お客様なんだから、ナプキンは首に掛けないとおかしいよ。

私は固まったが、それ以上に上司家族は固まっていた。
これはまずい雰囲気だ。

私は速攻でそのホローに回った。

あら奥さん、私がお食事のお手伝いをさせていただきますので、今夜は御ゆるりとどうぞ。

つまりない物しかないのでお口に合いますかどうか？

すると固まっていた上司の奥さんは、少し言葉を濁して、そ、それならお言葉に甘えてと、ナプキンを首の方へ掛け直した。

私は前菜からお皿に盛り付け各自に配り、どうぞ召し上がれと満面の笑みを浮かべた。

かなりの自信作のサーモンのマリネ。

しかしそれを前にした上司のお嬢さんが私に向かって聞いてきた。
この上にかかっている冷たいスープみたいなのは何？

私は満笑みを保ったまま、アスパラガスとかぼちゃの生クリームソースよ。と言うと、その子は、私かぼちゃ大嫌い！と言い出し、また私達と上司夫婦は固まった。

そこへうちの息子が口を尖らせて、好き嫌いはしちやいけないんだぞ。と、注意した。

私は普段から息子にそう言って聞かせているために、その娘さんのホローが出来ずに困っていると、上司である隣のご主人が、それを一口丁寧に食べながら、驚くように絶賛してきた。

なんとという豊かな味わいだろう。これが前菜だなんて、後に出てくる料理が楽しみでならない。

その言葉を皮切りに、皆は一斉に前菜を口にした。

そしてその皆のなんとも言えないにこやかさに、上司の娘さんも恐る恐るそれを口に始めた。

するとその口から出た言葉は、美味しい。かぼちゃの味なんかしないわ。の喜びの声で、一堂がその笑顔にホッと胸を撫で下ろした。

一段落したところで、私はサラダを盛り付け始めた。

彩りを考えたパプリカや、シャキシャキのレタス、ほんのり甘いトマト、そしてクルトンに特製ドレッシング。

皆は口々に美味しいを連呼したが、また、上司の娘さんが、

私トマトって嫌い。

と容赦なく皿に残した。

私はその皿を片付けようとしたところに、また内の息子が口を出した。

それ、リコピンちゃんって言うトマトだよ。

普通のトマトじゃなくて可愛くて甘いリコピンちゃんだよ。

私がかつてトマト嫌いの息子にトマトを食べさせようとして、苦肉の策で言い出した栄養素の名前。

なぜかそれが息子にはお気に入りの名前だった。

それを聞いた上司の娘さんは、トマトをフォークでイイヤヤ刺しながら口へと運んだ。

しかしそれを口に入れた瞬間、みるみる頬が弛んでいくのがわかって、口から次に出てくる言葉がその頬から浮かんでくるかのような満面の笑みに、私は息子を頼もしいとさえ思った。

さて、メインディッシュだ。

私は気合いを入れた。

昨日の家族会議で息子が一押しして譲らなかった、香りが決め手の蛎の香草焼き。

そして今晚のそれは、私の中では最高級の出来栄であった。

ガーリックトーストとバターを皿に乗せ、一人一人に配った後、私は少しもつたいぶったように、始めにそのスパイシーでエキゾチックな香りを部屋中隅々にまで漂わせた。

いい具合の最高のタイミングで焼き上がったその香ばしい仕上がりは、まさにメインにふさわしい。

私は少し自慢気にその皿を配り出した。

しかし、しかし上司の奥さんの表情を見て固まった。

脅えとも思えるそのコワバリ。

まさか。

確かに蛎は高級食材。しかも我が家の大好物。

だが、冷静に考えてみれば好き嫌いが激しい食材であることははっきりしていた。

蛎を凝視し、フォークとナイフに手が出ないでいる奥さんは、私の方をチラミした。

その目には、怨念にも似た血走りが何を訴えようとしているかを物語っていたが、その迫力を落ち着かせる一言が投げかけられた。

美味しい。最高に美味しいわ。

なんとも意外に意外だったのが、例の娘さんが、そう言い出した事だった。

私はそれをチャンスに飛込んだ。

それはよかった。広島最高級の蛎にイタリアの最高級のオリーブオイルにバジルとスパイス、スイスの最高級の粉チーズにフランスの最高級のパン粉、それに赤城の最高級の塩を使った甲斐があったわ。

名付けて、なんでも食材最高級の陣。

主婦ほど最高級に弱い生き物はいないだろう。

この連呼のお陰で奥さんは気を取り直したようで、蛎に少し興味を持つたらしく、冒険心が食欲に火つけて、それに憑き動かされてようやく、手にフォークとナイフを握らせた。

怖いもの見たさに似た感覚であろうか？

手は微かに震えてはいるものの、口はそれを今か今かと出迎えている。

蛎が投げ込まれた先には、暖かく滑らかな湖があったに違いない。

そこに滑り込んだ瞬間から脳には衝撃の伝達信号が送られ、感電に近いそのかつてない感覚が奥さんを感動の嵐、いや竜巻にでも拐ったかのように脳の一部に刻印を刻んだ筈だ。

確かにそんな顔をしていたのだった。

私は何かを確かに掴んだ気がした。

言い様のない満足感と達成感。

旦那も誇らし気に余裕の笑みを浮かべ、息子はいつになく大人のような落ち着きさえも魅せていた。

そんな息子を見る上司の娘さんの目が、心なしかウルンでいるかのように見えたのは私だけだろうか？

最後に熱くなった心を冷やすかのように、デザートはシンプルにブラマンジュのブルーベリーソース添えて締めた。

お隣の上司家族は満足感をこれでもかと言わんばかりに語り明かし、少し出したワインも手伝い、上機嫌の内に幕を閉じた。

私はやっと肩の力を抜くことが出来て、玄関にしゃがみ込んだ。

どうだった？我が家の蛎の香草焼きは？

最高だったわ。まるで本当のレストランにいるみたいだったわ。

パパがいつも帰って来るのが遅いから、久しぶりに家族揃って食事もできたしね。

次は君の家で夕食会だよ。期待してるね。

わかったわダーリン。私も手伝って美味しいお料理ご馳走するわ。

しかしうまくいったわね。あんなピラでまんまと騙せるなんて思わ

なかったわ。

パソコンって便利ね。子供だってあれくらいの書類作れちゃう。

そうだよ。大人はああいうのに弱いから。

しかしお金は大丈夫なの？

大丈夫。私、両親のへそくり見つけちゃったんだもの。家族やご近所さんに使うのならいけないことではないわ。

よし、今度は月に一度の近所旅行なんてどうだろう。二人の家族の距離もグンと縮まる筈だよ。

そうね。二人を認めて貰わないと。ねっ、ダーリン！

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6158e/>

ラブカクテルス その72

2011年3月26日07時00分発行